日本景観フォーラム会報　第 57 号　　発行日　2025 年 4 月

景観フォーラム

巻頭言

地理学は土地分類学的観点から景観を自然景観と文化（人文）景観に分けてきた。自然景観とは、地域ごとの景観を特徴付ける基盤であるとともに、自然の営力の一側面を我々に提示し、自然環境の有様への知的好奇心を育み、その理解を深める原点でもある。そして、地理学者の泰斗辻村太郎は文化景観を耕作景観・交通景観・村落景観・都市景観・工業景観の五つに細分した。人間が自然から頂いた土地を耕地にして生産物を享受できた耕作景観、人と人との交わりと生活全般の活動を支えている交通景観、人々が集まり鎮守の森を育ててきたコミュニティとしての村落景観、その村落を大々的に規模を拡大しいろいろな人々が生活する場としての都市景観、近代化の象徴としての工業景観というように人々の活動から景観を考えることができよう。

さて、日本景観フォーラムの活動は、年間を通じて、まちあるきを５回実施し、研究会を５回開催するような形態をとってきた。それぞれの内容は文化景観を漠然と見てきたというものであって、辻村太郎が提示する五つの分類、即ち、耕作景観・交通景観・村落景観・都市景観・工業景観というものに、今まで以上により意識的に関わりを以って行動するようにしたらどうかと考える。例えば、今回は工業景観、次回は村落景観、新たに水辺景観等々。そして、忘れてはならないのはウクライナで起きている戦争景観などである。

まちあるきの対象となる都市景観の場合は、その都市の特徴を見極めるということを意識的に考えてみるのも一考に値する事ではないかと思う。例えば、その都市の屋根、高さ、境界線、繁栄しているところ、衰退しているところ、等々、都市が発する、即ち住民が発する空気みたいなものを意識的に感じ取りそれを議論の俎上にあげるということである。景観を考えるということはそこに住んでいる人々の事を考えることでもあり、健全な生活が存在しているか、民主主義が活性化されているかを考察することでもある。

NPO 法人日本景観フォーラム理事長　斉藤全彦

訃報

会員の浅見賢治さんが２０２５年１月３日にて永眠されました。８９才でした。
浅見さんは地元埼玉県飯能市も含め各地で景観まちづくりを実践しておられました。
ここに、謹んで感謝の意とご冥福をお祈りしたいと思います。
会員一同

＜日本景観フォーラム 2025 年度年間スケジュール＞

＊2025 年度とは 2025 年 4 月 1 日～2026 年 3 月 31 日のことです。

2025 年

4 月 22 日（火）**第１回景観研究会**　総会・第１回理事会（18:00～20:00）於：JICA オフィス
5 月 15 日（木）**第１回景観まちあるき**【池袋】（担当：丹羽さん）
6 月 24 日（火）**第２回景観研究会**
7 月 26 日（土）**第２回景観まちあるき**【青梅】（担当：豊村さん）
8 月　　夏休み
9 月 24 日（水）**第３回景観研究会**
10 月 23, 24, 25 日（木、金、土）**第３回景観まちあるき**【伊豆大島】（担当：石見さん）
11 月 18 日（火）**第４回景観研究会**
12 月 18 日（木）忘年会【恵比寿】（担当：豊村さん）

2026 年

1 月 24 日（土）**第４回景観まちあるき**【野田】（担当：斉藤さん）
2 月 24 日（火）**第５回景観研究会**
3 月 21 日（土）**第５回景観まちあるき**【横須賀】（担当：豊村さん）

■以上のスケジュールは、ご提案ですので随時皆様のご意見を反映してまいります。

＜日本景観フォーラム 2024 年度年間スケジュール＞

＊2024 年度とは 2024 年 4 月 1 日～2025 年 3 月 31 日のことです。

2024 年

4 月 23 日（火）**第１回景観研究会**　総会・第１回理事会（18:00～20:00）於：JICA オフィス
5 月 12 日（日）**第１回景観まちあるき**【アークヒルズ】
6 月 25 日（火）**第２回景観研究会**（18:00～20:00）　於：JICA オフィス
9 月　7 日（土）**第２回景観まちあるき**【代官山】
9 月 24 日（火）**第３回景観研究会**（18:00～20:00）　延期
10 月 21 日（月）**第３回景観まちあるき**【洗足池】
11 月 19 日（火）**第４回景観研究会**（14:00～16:00）　オンライン会議
12 月 26 日（木）**忘年会**【恵比寿】中止

2025 年

1 月 7 日（火）新年会【目黒】ゆう月（18:00～）
1 月 25 日（土）**第４回景観まちあるき**【麻布】
2 月 25 日（火）**第５回景観研究会**（16:00～18:00）　オンライン会議
3 月 29 日（土）**第５回景観まちあるき**【三軒茶屋】

カオス化する景観　「産業革命から環境革命への流動？」

太刀上正則

科学技術の発展に伴い、我々の生活は、便利になったと言われるし、それも現実である。しかしながら、良く注視してみると、その発展的便利さを危惧する現象も現れているのかも知れません。

私が住まいする地域では、国内でも少ない路面電車が行き交う地域、栃木県の宇都宮市でも、同様の路面電車（LRT）が普及拡大、残される景観としての都電や江ノ電も、自然と心にやすらぎを与える故かもしれない。モータリゼーションにて、廃止されて消え去りかけた文化であるが、生きながらえる事から、新たに発展し始めているのではと思わせる。大阪万博発展にて構築された千里線モノレールは、廃止。その他にて形成された、団地向け交通機関のエスカレーターやエレベーターは、既に廃止されて存在しない。広島のモノレール「アストラムライン」は、路面電車と JR と主要拠点駅にて連結延長されている。逆に我が地域では、災害時対応と称して自動車専用道路の複線化の大工事や新たな路線工事がなされている。車減少・人口減少・労働力不足を唱える時代背景の中での多額投資は正しいのか？人口 100 万都市と 20 万都市の間を走る JR 単線の複線化（広島駅~三原駅間の呉線）の方が、時代の流れに会っているかも知れない。海の直ぐ側を走る風景は、鉄道フアンの好む風景でもあるし、大量輸送手段としては、廃線となるローカルでの活性化の一助かも知れない。我が地域では、路線バスの統合が検討され始めている。運転手不足と排気ガス対応（環境）と経営

路面電車

アムトラムライン

広島駅２F 完成模型

広島駅２F 路面電車乗り入れ口

難だそうである。発展経済を理由に、駅の大規模改修や県庁周辺や中心地の高層ビル化、人口減少時期や対応を求められている世界的環境課題への明確な思考と従来の発展への夢とのカオス化なのか。現実の視点と将来への視点のバランス思考が試されているのかも知れません。（広島県は、４年間連続して全国一位の人口減少。呉市は、主体産業が縮小する事にて、年間５千人程度の人口減。観光産業で補えるのか）

呉市では、且つての軍事産業拠点での日本製鉄の撤退や軍艦大和を製造した造船所等も縮小。その跡地の活用も議論されている。一方は、平和産業を。一方は、海上自衛隊の主力基地の隣接故に（安全・機密保持）防衛省が研究機関を含めた場所に希望。平和産業派は、「エネルギー産業誘致」「デジタル」「造船」にて活性化を（コンサルタント会社提案）。防衛省は、「防災拠点・ヘリポート」「装備品・維持・整備品製造」「研究機関」「市民運動場」等を提案。何か双方に、その他の大きな課題が忘れ去られている気がするのですが。軍港だっただけに、関連施設・企業が多く、世界的にもまれな巡洋艦や潜水艦を目の前に出来、曜日にては、乗船も可能、海外の人々は驚く場所としての不思議な景観である。従来は、その時点にての最良との前提（経済発展）が変化（産業発展から環境考慮＝防災視点・人口減少＝住みやすさも含め）。

海上自衛隊呉基地

音戸の瀬戸の新旧

我々の求める景観の良さは、何処に在るのでしぃうか？歴史と文化の発展は、時代の経済発展と相関であったはずと思うのですが、そこに従来は大きく意識されなかった「気候変動と環境維持」と言うベクトルが差し込まれ、そこに「人口減少・老齢化」なる付帯が加えられた感が致します。それだけに、観た瞬間のみならず、過去から未来への流れを推察しなければならない気が致すのは、私のみでは無い様におもうのですが。

麻布台ヒルズ・景観まち歩き

石見茂夫

２０２５年１月２５日（土曜日）景観まち歩きを麻布台ヒルズ・麻布十番で行いました。

東京メトロ日比谷線神谷町駅に集合して駅前から駅直前にある麻布台ヒルズへ向かいました。

駅から現地に向かう道は虎ノ門から狸穴交差点へつながる幹線道路になり平日は交通量が多いと思われるが当日は土曜日なので車は少ないようです。麻布台ヒルズに訪問する観光客と思われる人で想像以上に混雑していて、海外から観光で来た人達も多く見受けられました。

以下、森ビルの公開ホームページから麻布台ヒルズ関連の資料を抜粋して記載します。

麻布台ヒルズ開発経緯

このプロジェクトが動き出したのは 1989 年のこと。計画地はもともと東西に細長く、高台と谷地が入り組んだ高低差の大きい地形。地区内の道路は狭く、小規模な木造住宅やビルが密集するなど、防災上の課題も抱えていました。そこで 300 名を超える権利者とともに議論を重ねて再開発事業を推進。30 年超という年月を経て、2023 年に「麻布台ヒルズ」として開業したのです。緑地や道路など都市インフラも整備し、緑あふれる広場のような街が生まれました。

開発経緯

「麻布台ヒルズ」の計画地は、東西に細長く、高台と谷地が入り組んだ高低差の大きい地形です。敷地は細分化され、小規模な木造住宅やビルが密集し、建物の老朽化も進むなど、都市インフラからの整備が必要な状況でした。そこで、都市再開発法に基づく第一種市街地再開発事業によって、これらの課題を解決するとともに、道路や公園などのインフラを整備し、防犯防災面においても都市機能の更新を実現します。

平成元年（1989 年）に「街づくり協議会」を設立し、以降、30 年という長い年月をかけて、立場や事情の異なる約 300 人の権利者の方々と粘り強く議論を重ね、計画を進めてきました。平成 29 年（2017 年）には国家戦略特区法に基づき都市計画決定され、平成 30 年（2018 年）3 月の再開発組合設立認可を経て、令和元年となった 2019 年 8 月 5 日に着工、令和 5 年（2023 年）11 月 24 日に開業しました。

開発前の計画地の街並み

開発コンセプト

緑に包まれ、人と人をつなぐ「広場」のような街
- Modern Urban Village -

「麻布台ヒルズ」は、開発思想においても、世界に類を見ない、全く新しい都市づくりです。

テクノロジーが進歩し、働き方、暮らし方、そして生き方までもが大きく変わろうとしている今、「都市とはどうあるべきなのか？」「都市の本質とは何なのか？」という問いからプロジェクトがスタートしました。森ビルはこれまでも「都市の本質は、そこに生きる人にある」と考えてきましたが、改めて、人々がより人間らしく生きられる都市のあり方を考えました。

「麻布台ヒルズ」の開発コンセプトは「Modern Urban Village」。「緑に包まれ、人と人をつなぐ『広場』のような街」です。そして、「Modern Urban Village」を支えるふたつの柱は「Green」と「Wellness」。圧倒的な緑に囲まれ、自然と調和した環境の中で多様な人々が集い、より人間らしく生きられる新たなコミュニティの形成を目指します。

多様な都市機能が徒歩圏内に集約された都市の中の都市（コンパクトシティ）

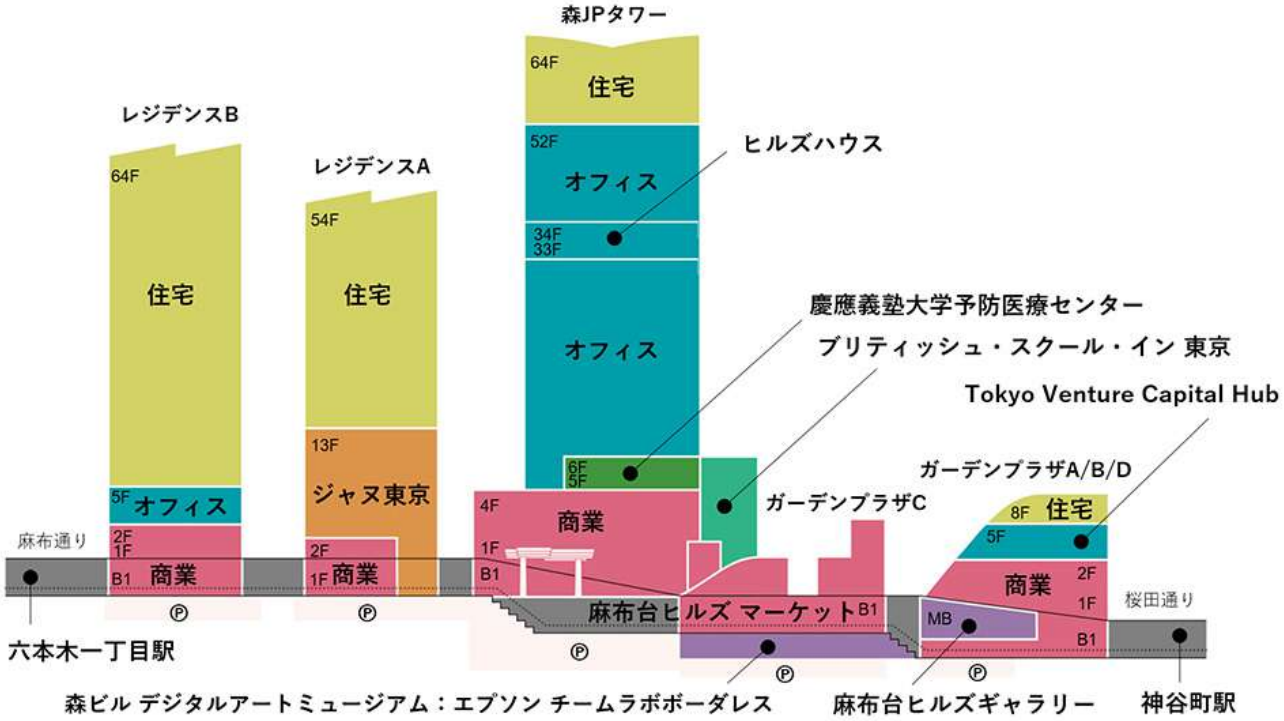
「麻布台ヒルズ」は、「アークヒルズ」に隣接し、「文化都心・六本木ヒルズ」と、「グローバルビジネスセンター・虎ノ門ヒルズ」の中間にあり、文化とビジネスの両方の個性を備えたエリアに立地しています。

約 8.1ha もの広大な計画区域は圧倒的な緑に包まれ、約 6,000m²の中央広場を含む緑化面積は約 24,000m²に上ります。延床面積約 861,700m²、オフィス総貸室面積 214,500m²、住宅戸数約 1,400 戸、「森 JP タワー」の高さは約 330m、就業者数約 20,000 人、居住者数約 3,500 人、年間来街者数約 3,000 万人で、そのスケールとインパクトは「六本木ヒルズ」に匹敵します。「麻布台ヒルズ」は、当社が理想とする「都市の中の都市（コンパクトシティ）」であり、これまでのヒルズで培ったすべてを注ぎ込んだ「ヒルズの未来形」です。

約 8.1ha もの広大な計画区域は圧倒的な緑に包まれ、約 6,000m²の中央広場を含む緑化面積は約 24,000m²に上ります。延床面積約 861,700m²、オフィス総貸室面積 214,500m²、住宅戸数約 1,400 戸、「森 JP タワー」の高さは約 330m、就業者数約 20,000 人、居住者数約 3,500 人、年間来街者数約 3,000 万人で、そのスケールとインパクトは「六本木ヒルズ」に匹敵します。「麻布台ヒルズ」は、当社が理想とする「都市の中の都市（コンパクトシティ）」であり、これまでのヒルズで培ったすべてを注ぎ込んだ「ヒルズの未来形」です。

六本木一丁目駅
アークヒルズ仙石山森タワー
六本木ファーストビル
神谷町駅
麻布通り
麻布台ヒルズ
レジデンス B
大養寺
ガーデンプラザ A
神谷町プレイス
セントラルウォーク
(アンブレラフリー動線)
桜麻通り
麻布台ヒルズ
レジデンス A
ガーデンプラザ C
八幡通り
ガーデンプラザ B
西久保八幡神社
ガーデンプラザ D
中央広場
オランダヒルズ森タワー
尾根道
麻布台ヒルズ
森JPタワー
タワープラザ
ブリティッシュ・
スクール・イン 東京
外苑東通り
N

施設配置図


森JPタワー
64F
住宅
レジデンスB
レジデンスA
52F
オフィス
ヒルズハウス
64F
住宅
54F
住宅
34F
33F
オフィス
慶應義塾大学予防医療センター
ブリティッシュ・スクール・イン 東京
Tokyo Venture Capital Hub
ガーデンプラザA/B/D
13F
ジャヌ東京
6F
5F
ガーデンプラザC
8F 住宅
5F
5F オフィス
4F
商業
2F
1F
B1 商業
2F
1F 商業
1F
B1
麻布台ヒルズ マーケット B1
MB
商業
2F
1F
B1
麻布通り
桜田通り
六本木一丁目駅
森ビル デジタルアートミュージアム：エプソン チームラボボーダレス
麻布台ヒルズギャラリー
神谷町駅

立面図

分断されていた交通網を整備、エリア全体の回遊性が大幅に向上

「麻布台ヒルズ」が位置するエリアは、桜田通り、外苑東通り、麻布通りに囲まれた中にありながら、東西を貫通する道路が未整備で、また、南北方向の主要な道路である通称「尾根道」は外苑東通りに抜けることができないなど、不完全な交通網が長年の課題でした。

しかし、「麻布台ヒルズ」によって、東西と南北の道路を整備することで、この地域の悲願でもあった道路ネットワークが完成します。さらに、六本木一丁目駅と神谷町駅を結ぶバリアフリー/アンブレラフリーの歩行者ネットワークも整備することで、周辺地区を含むエリア全体の回遊性向上に大きく貢献します。

人の営みがシームレスにつながる街

「麻布台ヒルズ」は、人々の営みがシームレスにつながる街になります。オフィス、住宅、ホテルなどの施設ありきで都市を設計するのではなく、施設の垣根を取り払って、人の営みから都市づくりにアプローチしました。この街では、「暮らす」「働く」「集う」「憩う」「学ぶ」「楽しむ」「遊ぶ」など、人々の様々な営みがシームレスにつながり、人と自然とが調和し、人と人がつながり、刺激しあいながら創造的に生きられる新しい都市生活を実現します。様々な施設がともに連携し、人々に新たなライフスタイルを提案することで、緑豊かな街全体が学びの場となり、仕事場となり、我が家となり、遊び場にもなります。

「Green＆Wellness」という新しい豊かさ

「Modern Urban Village」を支える 2 つの柱は「Green」と「Wellness」です。圧倒的な緑に囲まれ、自然と調和した環境の中で、多様な人々が集い、人間らしく生きられる新たなコミュニティを形成します。

「麻布台ヒルズ」では、はじめに人の流れや人が集まる場所を考え、街の中心に広場を据えて、シームレスなランドスケープを計画。その後、3 棟の超高層タワーを配置しました。これは、まず建物を配置し、空いたスペースを緑化するという、従来の手法とは全く逆のアプローチです。高低差のある地形を生かして、低層部の屋上を含む敷地全体を緑化することで、都心の既成市街地でありながら、約 6,000m²の中央広場を含む約 2.4ha の緑地を実現しました。水と緑がつながるランドスケープを整備し、自然あふれる憩いの場を創出するだけでなく、都心部におけるヒートアイランド現象の緩和にも寄与します。

また、「麻布台ヒルズ」では、都市づくりにおけるサステナビリティも推進します。街全体で「RE100」に対応する再生可能エネルギー電力を 100%提供するなど脱炭素や資源循環を推進。国際的な環境認証プログラム「LEED」の 2 つのカテゴリにおいて、最高ランクとなるプラチナ認証も取得予定です。加えて、外部施設や医療機関とも連携しながら、この街で住み、働くことの全てが「ウェルネス」に繋がる仕組みを導入する予定です。

本プロジェクトでは、都市の低炭素化、生物多様性の保全、省エネルギー化、真に豊かな健康など、世界中が頭を悩ませている様々な課題に対する 1 つの解を提案します。

立地

麻布台ヒルズの周辺はホテルや大使館が多く集まり、グローバルで文化的にも豊かなエリアです。またアークヒルズに近接し、文化都心・六本木ヒルズとグローバルビジネスセンター・虎ノ門ヒルズの中間に位置しています。それぞれの個性を持ったヒルズがつながり、住宅・オフィス・文化施設・商業施設などの都市機能がさらに集積することで、都市に生きる豊かさがさらに広がります。まさに新時代の東京を象徴するエリアです。

麻布台ヒルズは、区域面積約 8.1ha、延床面積約 86 万㎡。開発前の 5 倍以上となる約 24,000 ㎡の緑地を整備し、都心にありながら緑あふれる環境を実現しました。そこにオフィス、レジデンス、商業施設、マーケット、ホテル、デジタルアートミュージアム、ギャラリー、インターナショナルスクール、医療施設など、多様な都市機能が集積したコンパクトシティです。豊かな環境の中で、「Green&Wellness」なライフスタイルを叶えます。

データシート

計画名称　　虎ノ門・麻布台地区第一種市街地再開発事業
所在地　　東京都港区虎ノ門 5 丁目、麻布台 1 丁目および六本木 3 丁目の各地内
開発区域面積　約 8.1ha
敷地面積　約 63,900m²
麻布台ヒルズ森 JP タワー　約 24,100m²
麻布台ヒルズレジデンス A　約 16,500m²
麻布台ヒルズレジデンス B　約 9,600m²
ガーデンプラザ A,B,D　約 12,000m²
建築面積　約 37,100m²
延床面積　約 861,700m²
麻布台ヒルズ森 JP タワー　約 461,800m²
麻布台ヒルズレジデンス A　約 169,000m²
麻布台ヒルズレジデンス B　約 185,300m²
ガーデンプラザ A,B,D　約 43,800m²
オフィス面積　約 214,500m²
緑化面積　約 24,000m²
住宅戸数　約 1400 戸
店舗面積　約 23,000m²
用途 事務所、住宅、店舗、ホテル、文化施設、インターナショナルスクール、診療所　他
階数 麻布台ヒルズ森 JP タワー　64 階
麻布台ヒルズレジデンス A　54 階
麻布台ヒルズレジデンス B　64 階
高さ 麻布台ヒルズ森 JP タワー　約 330m
麻布台ヒルズレジデンス A　約 240m
麻布台ヒルズレジデンス B　約 270m
ガーデンプラザ A,B,D　約 41m
着工 2019 年 8 月
竣工 麻布台ヒルズ森 JP タワー　2023 年 6 月
ガーデンプラザ　2023 年 6 月
麻布台ヒルズレジデンス A　2023 年 9 月
構造 S 造（一部 SRC 造）　他
設計 森ビル(株)
施工 清水建設(株)、三井住友建設(株)、(株)大林組　他
施行 施行者：虎ノ門・麻布台地区市街地再開発組合、特定建築者：森ビル(株)

麻布台ヒルズ森ＪＰタワー

1 フロア最大約 4,800 ㎡のオフィス。強固な BCP 対応、最先端の環境性能はもちろん、街全体をワークプレイスとして活用する「ヒルズハウス」などの関連施設も充実。高い付加価値を提供します。

延床面積	約 461,770m²（約 140,000 坪）
用途	住宅、事務所、診療所（無床）、店舗、インターナショナルスクール、駐車場など
階数	地上 64 階、地下 5 階
構造	S 造（一部 SRC 造）
総貸室面積	約 202,000 ㎡（約 61,000 坪）
基準階貸室面積	約 4,300 ㎡～約 4,840 ㎡（約 1,290 坪～約 1,460 坪）
基準階天井高	3.0m
竣工	2023 年 6 月

ヒルズハウス麻布台

企業の垣根を越えてワーカーが集い、ウェルビーイングを促進するクラブハウス。街と企業が連携し、麻布台ヒルズでしか実現できない豊かなワークスタイルを実現します。

昼間はワークプレイス＆カフェテリア、夜はバーラウンジとして、カジュアルで心地よい空間でワーカー同士のコミュニケーションや交流を促進するサードプレイスのような場となります。WELL 認証*の基準を満たす、健康に配慮した食事メニューをはじめ、ワーカーのウェルネスを食の側面からサポートします。

*WELL 認証とは： 建物環境の人の健康やウェルネスに及ぼす影響に注目した世界初の建物基準です。主に室内環境や、健康に繋がる 施設・サービスを評価します。

ワーカーの健康的なワークスタイルを支えるファシリティを整備。共用ワークスペースに加えて、ミーティングルームや個室ブース、ライブラリー、仮眠室など多様な空間で、ワーカーの自由な働き方をサポートします。

通常時はワークスペースとしてご利用いただけるほか、平日の朝や夕方、週末はセミナーやカジュアルな懇親会、ヨガやストレッチなどのプログラム、会員限定のコミュニティイベントも開催。ワーカーの心と体の健康や社会とのつながりに注目した、メンバーシップ活動の拠点となるエリアです。

眺望を楽しめる座席や、本に囲まれ落ち着いた空間など、用途や気分にあわせてタイプの異なる空間とファシリティを自由に選べます。朝 8 時から 23 時まで開館し、多様なライフスタイルに合わせてご利用いただけます。またレセプションスタッフが常駐するなど、会員制ならではのセキュリティーで安心して利用できます。

施設設備情報

・飲食スペース　座席 333 席
・ワークスペース　座席 49 席
・館内のどこでも Wi-Fi を利用可能です。
・館内では電源をご利用可能です。

商業施設

広大なエリア全体で約 150 店舗が展開。ファッション、フード、ビューティー、カルチャー、アート、ウェルネスなど、多彩な店舗が揃います。

麻布台ヒルズ マーケット

「食を通して暮らしと未来を豊かに」生鮮三品から総菜、グロッサリー、ワインリカー、スイーツ、フラワー等、日々の暮らしを豊かにしてくれる食材や丁寧に作られた総菜が日々の食卓を彩ります。

ショップ&レストラン

この街には、毎日を彩る飲食店が充実。また、世界トップクラスのブランドのほか、ファッションやカルチャー、アートなどの店舗も豊かな生活を彩ります。

ホテル

ラグジュアリーホスピタリティのパイオニアであるアマンが手掛ける、世界初の姉妹ブランドホテルであるジャヌ東京は、ライブ感あふれるダイニング、心身のバランスを整えるウェルネス、心温まるホスピタリティで、国内外からのお客さまをお迎えいたします。

アート&ギャラリー

麻布台ヒルズは「街全体がミュージアム」。デジタルアートミュージアムや麻布台ヒルズ ギャラリーをはじめ、アートに関わる様々な施設が集積し、心豊かで刺激のある暮らしを彩ります。

森ビル デジタルアート ミュージアム：エプソン チームラボボーダレス

お台場で世界中から圧倒的な人気を博したデジタルアートミュージアムが麻布台ヒルズに移転開館。世界初公開の新作をはじめ、さらに進化した「チームラボボーダレス」をお楽しみいただけます。

麻布台ヒルズ ギャラリー

麻布台ヒルズにおける文化発信の中核として、美術館仕様の施設・設備を備え、アート、ファッション、エンターテイメントなど、多様なジャンルの文化を発信します。

パブリックアート

森美術館監修の Green&Wellness のコンセプトに沿うパブリックアートが、麻布台ヒルズの日常を豊かに彩ります。

慶應義塾大学予防医療センター

これからの時代を担う高度な「予防医療」を提供し、全ての人がいつまでも健康で充実した豊かな毎日を過ごせる社会の実現を目指します。

予防医療とは、いわば一生を守る医療です。当センターでは高度な専門スキルを持つ医療チームが一丸となり、受診者ご本人と共に健やかな人生をサポートしていきます。一人ひとりすべて違う価値観を尊重し、不安や希望に寄り添いながら、それぞれのライフスタイルに応じて生活習慣などを改善するアドバイスをします。次世代の予防医療サービスを提供することで、誰もが生涯にわたってウェルネス、ウェルビーイングを実現できる社会を担っていきます。

ブリティッシュ・スクール・イン 東京

都心最大級の生徒数を誇るインターナショナルスクール。豊かな自然を感じられる環境の中、国際感覚に優れた子供たちを育むための教育環境を実現しています。

緑・広場

敷地の 1/3 にあたる約 24,000 ㎡を緑化。人々が憩える芝生広場や果樹園などとあわせ約 320 種の植栽を展開し、圧倒的に豊かな緑を実現しています。

中央広場

自然と調和した環境を実現する麻布台ヒルズのシンボル。季節ごとに表情を変える多様な植栽が人々の営みを繋ぎます。

果樹園

約 200 ㎡の果樹園では、温州ミカンやブルーベリー、レモン、リンゴ、ダイダイ、など 11 種の果樹を育て、収穫時には実際に触れられる機会を提供します。

麻布台ヒルズアリーナ

トーマス・ヘザウィック氏が手掛けた「The Cloud」と一体となったアリーナ。アイデアの発信拠点として、訪れるたびに新しい刺激をもたらします。

神谷町駅前広場

日比谷線神谷町駅直結の駅前広場。オープンな空間に様々な人々が行き交う、街の玄関口の一つです。

桜麻通り

街の東西をつなぐ麻布台ヒルズのメインストリート。春には様々な種類の樹木が芽吹き、訪れる方々に様々な表情を見せてくれます。

外務省外交史料館 展示室

外務省外交史料館 展示室には幕末以来の日本外交の歩みを示す重要な条約書などを展示しています。
また、テーマを決めた企画展示も定期的に開催しています。
外交史料館は、幕末以来の日本の外交史料を保存し、皆さまの利用に供している外務省の公文書館です。
当館では外交史料の整理・公開、「日米修好通商条約」などの貴重な条約書、史料に関する展示、明治以降の主要な外交史料を編纂・活字化した『日本外交文書』の刊行、デジタル公開を行っています。

アマンレジデンス 東京

東京タワーを俯瞰するアマンレジデンス 東京は、竣工時には日本一の高さとなり、森ビルが 30 年以上もの歳月をかけて取り組んできた「虎ノ門・麻布台プロジェクト」のなか、A 街区メインタワー最上階 11 層に誕生します。そこは平穏と静寂に包まれたアマンならではのサンクチュアリです。
国際都市の洗練さと、小さな村のような親密さを兼ね備えた虎ノ門・麻布台プロジェクトは、東京の真ん中に「緑に包まれ、人と人をつなぐ“広場”のような街」を実現します。ﾍｻﾞｳｨｯｸ・ｽﾀｼﾞｵ(英国)とペリ・クラーク・ペリ・アーキテクツ(米国)によって 設計された約 8.1 ヘクタールもの広大な計画区域は圧倒的な緑に包まれ、自然と調和した環境の中でﾞ多様な人々がﾞ集う新たなコミュニティの形成を目指します。心を落ち着かせる緑のなかでﾞ、多彩な食や文化体験、インターナショナルスクールや 美術館・ｷﾞｬﾗﾘｰなどﾞを用意し、人々の営みをシームレスにつなぐﾞ新たな都市生活がﾞここでﾞ始まります。
居住者およびそのゲストの皆さまは、54 階と 56 階にあるティー ルーム、ライブラリー、リーディングルーム、ラウンジ、バー、専用シェフがサービスを提供するプライベートダイニング ルームなど、居住者専用の施設を多数ご利用いただけます。25m のプライベートプールを含む 1,400 ㎡のアマン・スパ からは都心のパノラマ景色を望め、平穏と静けさに包まれたアマンならではのサンクチュアリを見渡す限りの眺望と共に満喫いただけます。

麻布台ヒルズ ガーデンプラザレジデンス

建築概要・基本情報　　総戸数　31 戸
階数　地上 8 階、地下 3 階
構造　S 造（柱 CFT）、一部 RC 造
耐震性能　制振構造
敷地面積　6,348.47 ㎡

森ビルが追求してきた人間中心の街づくりを、さらに進化させたヒルズの未来形「麻布台ヒルズ」。
コンセプトは、緑に包まれ、人と人をつなぐ「広場」のような街 - Modern Urban Village -です。テーマは Green & Wellness。都心でありながら自然と調和した環境の中で、多様な人々が集い、豊かなコミュニティを形成します。
街の中心には約 6,000 ㎡の広場があり、高低差のある地形を生かしながら敷地全体で圧倒的な緑を実現しました。なかでも「麻布台ヒルズ ガーデンプラザレジデンス」は、緑を最も身近に感じられる低層部にあります。
麻布台ヒルズ ガーデンプラザレジデンスは、この街では唯一となる低層住宅です。窓から見える街路樹からは四季の変化も感じられ、まさに麻布台ヒルズのなかで最も緑に近い住宅と言えるでしょう。

有機的な曲線で構成され自然と一体になったユニークな外観デザインは、数々の独創的なプロジェクトを手掛けてきたイギリスの世界的なデザイナー、トーマス・ヘザウィック氏が担当しています。

麻布台ヒルズでは街全体に約 150 店舗の多彩な商業施設が広がるほか、約 4,000 ㎡の大規模なマーケット、ギャラリーやミュージアム、インターナショナルスクールなど、豊かに生きるためのさまざまな都市機能がシームレスにつながるコンパクトシティとなっています。この街には、五感を刺激する体験と特別な時間があります。

またウェルネスな街らしく、大規模なウェルネス施設を有するジャヌ東京のほかにも、慶應義塾大学予防医療センター、居住者専用の健康相談室（2025 年春開業予定）などが日々の健康を支えます。

麻布台ヒルズ周辺の環境

霊友会教会（釈迦殿）

麻布台ヒルズの隣接地には霊友会の釈迦殿があります。

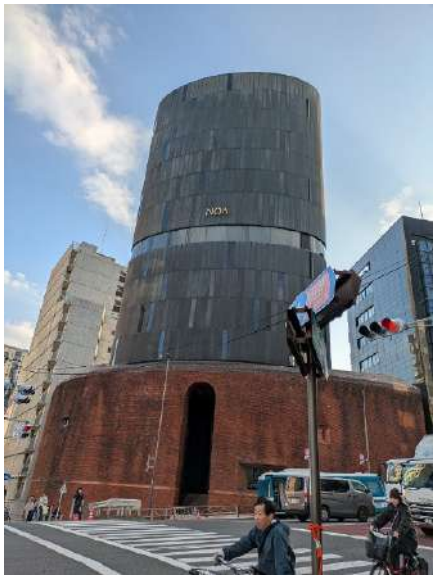
１９７５年に完成した釈迦殿は礼拝堂として使われてます。

特徴的な大屋根とハザードは独特のデザインの艶消しのカラーステンレスを使用ししていて重厚感と合わせて荘厳な雰囲気を醸し出しています。

エントランスの大階段は桜御影石が使用されています。

設計施工　：竹中工務店
延床面積　：25,720 ㎡
構造　　：鉄骨造、鉄骨鉄筋コンクリート造
規模　　：地上 3 階　地下 6 階

ノアビル



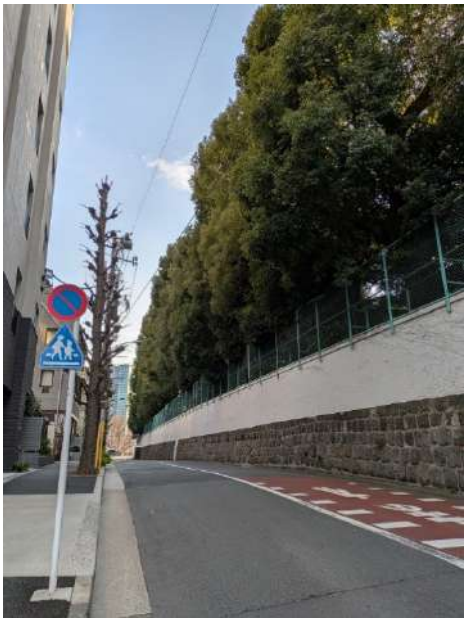
麻布台ヒルズの東側の飯倉交差点（狸穴）に面して、１９７４年に完成したノアビルがあります。

特異なデザインはインパクトが大きく周辺の景観に変化を与え、東京・飯倉の新しいランドマークタワーとして注目を集めています。オフィスやショールームとして使われています。

外観下層部は耐火レンガで作られ、上層部は硫酸銅仕上げの楕円筒形、内装は窓を少なくし、石で静かな空間を構成し、かつ豊かさを取り入れられています。

設計　　：白井晟一　（構造設計）　　竹中工務店設計部
施工　　：竹中工務店
構造形式　：鉄骨鉄筋コンクリート構造
延床面積　：10,386.04 ㎡
階数　　：地上 15 階・塔屋 2 階・地下 2 階　高さ 61.75m

東京アメリカンクラブへの道



　飯倉交差点から六本木方面に向かうとアメリカンクラブへ向かう道路があります。ロシア大使館の重厚な塀と樹木の脇にあるあまり目立たない道路ですがこの突き当りに東京アメリカンクラブがあります。

　１９２８年に在日アメリカ人とその家族が中心になり会員制社交クラブとして設立されました。

　１９５４年に当地の麻布台に移転され、当地は尾張藩主徳川慶勝の大名屋敷跡で１９７５年に新しいクラブハウスが建設されました。

　２０１０年に老朽化した旧クラブハウスを建て替え、敷地南東半分には定期借地権方式の分譲マンション『麻布台パークハウス』が建設されています。

麻布十番交差点（新一の橋交差点）

　麻布台ヒルズから坂道を下り１５分位歩くと麻布十番交差点（新一の橋交差点）に出ます。

　交差点の上部は首都高速道路都心環状線と２号線が分岐する一ノ橋ジャンクションとなっています。

　ジャンクションの三角地は港区が管理する一の橋公園として利用されており、地下部分は古川調節池排水施設となっています。

　交差点から南側に東西に並行する道路が麻布十番商店街通りとなっており、昔からの名店が多く集まっていて多くの人々で賑わっています。

　商店街を西にさらに進むと徒歩１０分程で六本木ヒルズに行くことができます。

※　麻布台ヒルズに関する計画データ、一部の写真等の資料は森ビルＨＰから抜粋しました。

「変わる街、変わらない時間　麻布台を歩く」

尾崎孝行

久しぶりに麻布台を歩いた。

ここは、港区のど真ん中にありながら、どこか隠れ家のような雰囲気を持つ街だった。六本木の喧騒とも、麻布十番の温かみのある賑わいとも違う、独特の静けさがある。高級マンションが立ち並ぶ一方で、路地裏にはひっそりとした住宅街が残っている。何の変哲もない住宅街の一角に、歴史を感じさせる小道が顔を覗かせることもある。

歩くたびに、街のリズムが変わる。坂道を上ると視界が開け、またすぐに閉じる。高層ビルが林立する都心にありながら、風景はどこか人の営みに寄り添っている。
そんな曖昧で、けれど心地よい街。それが、私にとっての麻布台だった。

だが、その風景が今、大きく変わろうとしている。

目の前にそびえるのは、麻布台ヒルズ。これまでの麻布台にはなかった、巨大なビル。新しく生まれたこの街は、果たして以前の麻布台と同じ空気を持っているのだろうか。

初めて麻布台ヒルズに足を踏み入れたとき、その規模の大きさに圧倒された。ガラスの塔が青空を映している。虎ノ門ヒルズを手がけた森ビルによる再開発とあって、その完成度と高さは想像していた以上だった。

だが、私の足を止めたのは、ビルの高さではなかった。その眼下に広がる「麻布台ヒルズの緑」

※出典：森ビル HP 「麻布台ヒルズ：施設概要」より

「本当にここが東京の中心なのか？」

そう思わずにはいられないほど、木々が生い茂っている。計算され尽くした配置であることは一目瞭然だが、それでも人工的な冷たさを感じさせない。

中心部に足を踏み入れると憩いの場が広がる。ベンチには親子連れの姿もある。
都市は再開発のたびに新しい価値観を提示する。それは、より高く、より大きく、より便利に。けれど、麻布台ヒルズが目指したのは、それだけではなかったのかもしれない。高層ビルの下に、こうした開かれた空間があることで、この街は「ただの新しい街」ではなくなった。

風が吹いた。都市の風はビルの隙間をすり抜けて冷たくなりがちだが、ここで感じる風はどこか柔らかかった。

麻布台ヒルズ内にある「麻布台ヒルズマーケット」にも立ち寄った。ここは、いわゆる高級スーパーとは少し違う。単なる食材の販売ではなく、食文化そのものを提案するような空間だった。

店内には、こだわりの食材が並ぶ。オーガニック野菜、熟成チーズ、手作りのパン、地方の名産品。パッケージを眺めるだけで、その背景にある生産者の思いが伝わってくるようだった。

「ちょっと高いな」

そんなことを思いながらも、気がつけば手に取ってしまう。価格だけを見れば、日常使いするには少し贅沢かもしれない。でも、特別な日や、少しだけいいものを食べたいときに、この店を訪れるのは悪くない。

ふと周囲を見渡すと、買い物を楽しむ人々の表情が穏やかだった。ここでのショッピングは、ただ「買う」という行為以上のものなのかもしれない。目新しいものに出会い、それをどう生活に取り入れるかを考える時間そのものが、豊かさの一部になっているのだろう。

都市の豊かさは、お金や利便性だけでは測れない。こうした「時間の楽しみ方」こそが、新しい街に求められているものなのかもしれない。

再開発には賛否がつきものだ。変化を歓迎する人もいれば、かつての街並みを惜しむ人もいる。それはどちらが正しいという話ではない。都市は、そこに生きる人々とともに変わり続けるものだから。

麻布台はこれからも変わり続けるだろう。新しいビルが建ち、新しい店が生まれる。そのたびに、この街の印象は少しずつ塗り替えられていく。それでも、この場所に流れる「時間」そのものは、きっと変わらないはずだ。

高層ビルの間を吹き抜ける風。木々の間からこぼれる午後の光。坂道を上るときに感じる、ふとした静けさ。

そうしたささやかな瞬間が、この街の記憶となっていく。

だから、またしばらくしたら、きっとこの街を訪れるだろう。そして、そのときの麻布台を、また新しい目で眺めてみようと思う。

※出典：麻布台ヒルズ HP より

＜ＬＦＪブックレヴュー 87＞

『水の都市 江戸・東京』　陣内秀信＋法政大学陣内研究室編

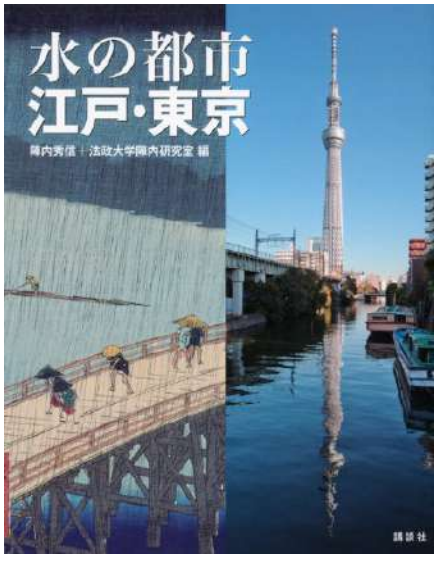
2013 年　講談社刊

斉藤全彦

1908 年ヘンリー・フォード（1863−1947）はＴ型フォード車を発表した。これは、トーマス・エジソン（1847-1937）が 1879 年に電気を利用した電灯を発明し、文明開化の凱歌を上げてから 30 年も経ていない。そして、日本では明治維新が 1868 年に決行され、欧米が牽引する近代化に邁進することになる。1903 年にはアメリカのライト兄弟が有人飛行に成功するという時代である。近代化を象徴するこの陸・海・空の移動手段の大変化はまさに 19 世紀の後半に始まったと言えよう。景観の革命的変化というのもこの近代化の始まりと共に、世界に大変化をもたらしたのではないか。

江戸時代まで即ち 1967 年まで東京の移動手段は船であった。陸上輸送は人力では限界があり、牛馬が大いに役立ったであろう。しかし、物資の大量輸送はやはり舟運が効率的であったろう。海上輸送と河川輸送が最も効率よく物資を運んでくれたことは想像に難くない。そして、ここに音の景観なるものを考えると、モータリゼーションに突入する前の世界というのは何と静かな、色々な軽妙な音を奏でていたのだろうと想像するのも面白い。

さて、水の都市“江戸”であるが、江戸城には内濠と外濠が戦略上造成された。戦争のため造成されたとはいえ、徳川家康によって江戸城が政治の中心になってからは、濠も象徴的なものと変化し、現代では東京市民の良きリクリエーションの場となっている。江戸には舟運に欠かせない川として、墨田川、日本橋川、そして神田川を代表格として挙げられる。「隅田川は、甲斐・武州・信州の三地域にまたがる標高 2,475mの甲武信ヶ岳を源とする荒川の千住あたりからの総称であり、大川とも呼ばれた。地区ごとに千住川、浅草川、宮戸川とよばれていた」という。現代の常識では考えられないが、この川は、みそぎの場、即ち聖なる川であった。そして、「人口 100 万人を優に超す循環型大都市の経済を支える大動脈であり、物流ターミナルであった」のである。次に日本橋川は、千代田区三崎町で神田川から別れ、中央区日本橋箱崎町で隅田川にそそぐ。首都高速道路がその上を通るまでは、日本橋を中心に江戸・東京の賑わいの中心であり、物流の大動脈であった。最後に神田川であるが、三大動脈の一つとして、都心を流れるにもかかわらず、最も人口を抱える川として江戸から現代までの文化と技術が合わさった景観を数多く残している。



ところで、下町の密集地帯を流れる 11 の河川の中でも六つの河川のネットワークを取り上げたい。江戸時代初期に運河として開削された本所の北を流れる＜北十間川＞、これも人口の運河で隅田川と旧中川を結んでいる＜小名木川＞、江戸城から見て横即ち南北に流れている深川の木場への材木輸送のために掘られた運河の＜横十間川＞、荒川放水路の開削で水辺に親しむように造られた＜旧中川・川の駅＞、材木置き場として使用されていた運河で砂町運河と合わせて＜仙台堀川＞となり、最後に東京スカイツリーの西側で北十間川から分かれて南に向かい隅田川に合流する＜大横川＞。また加えて、豊かな水源をもつ玉川上水、桜並木で有名な目黒川、そして近隣住民の憩いの場として親しまれている杉並区の善福寺を水源とする善福寺川を挙げておきたい。

〒150-0031
東京都渋谷区桜丘町 14-5-502
TEL : 03(3780)3814
FAX : 03(6379)6681
E-mail : info@keikan-forum.com
URL : https://www.keikan-forum.org

Landscape Forum of Japan